

ゼカリヤ書8章3節 「真実な町」

1A 真実を語る町

2A 自分のための奉仕

3A 互いへの奉仕

4A 心からの奉仕

本文

私たちのゼカリヤ書の学びは、先週で6章まで来ました。今日は、午後礼拝で7-8章を一節ずつ見て行きます。今朝は、8章3節を中心にお話していきたいと思います。「主はこう仰せられる。「わたしはシオンに帰り、エルサレムのただ中に住もう。エルサレムは真実の町と呼ばれ、万軍の主の山は聖なる山と呼ばれよう。」」

1A 真実を語る町

7章と8章の預言が語られたのは、神殿の建設が始まってからしばらくのことです。ダリヨス王の第二年に神殿の礎が据えられましたが、今は第四年です。そして神殿が完成するのは第六年のことです(エズラ 6:15)。ですから、神殿の建設が行なわれている途中のことでした。その時に、主に願うために、預言者ゼカリヤのところにやって来たユダヤ人たちがいました。長年のこと、第五の月には断食をして泣いていたけれども、今、それをする必要はありますか？ということです。その断食は、バビロンがエルサレムを破壊した月であり、彼らはバビロンにいる間、ずっと神殿が破壊されたことを思い、第五の月に断食をしていました。今、新しく神殿を建てています。破壊されたことを悲しむしきたりを、今も続けていくべきなのか？とゼカリヤに質問しにきました。

ゼカリヤは、厳しい言葉を彼らに話しました。自分たちが、悲しむ断食を行なっていてよいものなのか？というとても誠実に見える問いかけです。とても真面目に見えます。これまで行なってきた、行事をきちんとこなしていきたいという思いがあります。そして、当然ながら神殿を再建しているのに、神殿が破壊されたことを覚えるのは、もう不要になってきたのではないかと考えるでしょう。しかし、主は、ゼカリヤによって彼らに厳しい言葉を語られました。7章と8章に繰り返し出て来る、主の言葉は「真実」でありました。今、読んだところに、エルサレムを主が、「真実な町」と呼ばれるようになると言われていました。7章8節に、主が、「わたしは真実と正義をもって彼らの神となる」と言われます。8章16節に、「互いに真実を語り、あなたがたの町囲みのうちで、真実と平和のさばきを行なえ。」と言われていました。19節にも、「だから、真実と平和を愛せよ」と主は言われます。

そうです、今、尋ねて来ていた人々、そこにいるユダヤ人はとても真面目でした。しかし、主の前

に真実であるか、誠実であるかは別なのです。人間的には、大きな欠けを見つけることはできないことでしょう。しかし、主ご自身が心を見られます。イエス様は、「ヨハネ 7:24 うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。」と言われますが、人は上辺で生きています。正しい裁き、人の心で思い計っているところまでは届きません。しかし、ともすると私たちは、神を信じる民であるにも関わらず、上辺で真面目に生きていることがあります。真面目なのです、けれども心が主の前で真実ではない、誠実ではないということが起こります。人間的には決して、責められるところがなかったとしても、主の聖霊は神の家に働いておられます。それで、人には良く見えても、実は真実ではない、偽ってしまっている部分があるということです。

私たちは、教会として神の家と呼ばれています。「この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあつて、あなたがたとともに立てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。(エペソ 3:22)」私たちは、一般の社会では問題とさえならなかったことが、教会の中で自分自身でさえ気づかなかった課題や問題に気づくことがあります。それは教会が単に人の集まる場所ではなく、神の前に出てきている一人一人の人格、霊であるからです。

2A 自分のための奉仕

彼らの問題とは、神に対する奉仕を「自分たちのためにしている」ということが一つに挙げられました。7章 5-6節を読みます、「この七十年の間、あなたがたが、第五の月と第七の月に断食して嘆いたとき、このわたしのために断食したのか。あなたがたが食べたり飲んだりするとき、食べるのも飲むのも、自分たちのためではなかったか。」真面目に断食をしていたのですが、それが自分のためのものだったということです。家族で主の祭りの時に食べたり飲んだりしていても、自分の都合が先になってそれらを行っていたのではないか？ということです。自己修養のためになっています。自己実現のためかもしれません。自分の都合がまず先で、それで主に仕えること、主を礼拝することが自分の益になるから行っている、ということです。

パウロが、ピリピにいる教会の人たちに手紙を書いた時に、「テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもないからです。だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。(ピリピ 2:20-21)」と言いました。ピリピにある教会の人たちのことを、心に留めている人たちがかなり少なかったようです。その理由をパウロは、一人一人が自分自身のことを求めているからだ、ということなのです。そうすると、表向きはそれなりに立派に教会でふるまっていますが、本当の必要、本当に愛の行ないをしなければいけないこと、こういったところに助けは及びません。自分の益になることはしますが、教会全体の益になることはしません。そのために、物理的には活動は続くのですが、真実な交わり、平安、喜び、聖霊のご臨在などが見えなくなってくるのです。断食をしていた彼らのところに、そういった真実が見えなかったのは、そのためでした。

パウロが愛を定義した時に、「自分の利益を求めず(1コリント 13:5)」と言いました。その前に、礼儀に反することをせず、ともあります。ゼカリヤ書の次はマラキ書ですが、携えるいけにえが傷があったり、欠陥があるものが多いことを主は指摘されましたが、「総督に対して贈り物をする時に、そのようなものを持つてくることができるのか？」ということ、主は言われました。高い地位にある人に対しては、自分は緊張して、どんな贈り物であれば失礼に当たらないか注意を払いますが、主の前に出て来る礼拝において、適当にその場にあるものを捧げるということを主は、責めておられます。人に対しては非常に気を使うのに、いつもいっしょにいる兄弟姉妹に対して、一般の社会では行わないようなことを平気でしてしまうことがあります。それは、自分自身の修養のために主を礼拝してしまっているからです。

そして、自分たちの利益を求めると、主がそこでお独りにさせることになるのです。マタイ 22 章で、イエス様は王子の披露宴について、お語りになりました。王が招待していた客を呼びに、しもべを遣わしましたが、「ある者は畑に、別の者は商売に出て行き、そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった。(5-6 節)」とされています。それで、王は、大通りにいって、出会った者たちをかたっぱしから宴会に招きなさいと言ったとイエス様は言われます。近所付き合いや、サークルであれば、自分の行きたいところに行くことになるでしょう。しかし、私たちの集まりは、自分が行きたいから来るものではありません。王から命じられていることです。他のいかなる共同体や集まりがあっても、それらは自分の利益のために集まっているのですが、神の家の集まりは、王なるイエスのところに集まるのです。この方の栄光のため、この方の栄誉のため、この方の名前のゆえに集まります。まったく、そこでは自分の都合というものが許されないのです。王であり、私たちは僕ですから。もし自分の都合で動くなら、王子一人を披露宴に残しているという、非常に失礼なことをしてしまうということになります。

3A 互いへの奉仕

続けてゼカリヤは、尋ねに来たユダヤ人たちに、主の言葉を告げました。7 章 9 節です、「正しいさばきを行ない、互いに誠実を尽くし、あわれみ合え。」自分自身を求めるならば、主に対して愛がないだけでなく、他の仲間に対して愛が無い行為をしてしまいます。ここに、「互いに」誠実を尽くしなさい、互いに憐れみ合いなさいと命じています。自分が断食をしているというところに、実は自己満足的なものがあります。自分の中で自己完結しているのです。ただ、自分がその場に行けばそれで事は終わりだと思っているのです。しかし、神を愛することは、自分自身の兄弟を愛することによって、初めて示されます。神を愛していることによって、兄弟を愛します。兄弟を愛していなければ、神の愛は知らないし、神を知っていないということを、使徒ヨハネは第一の手紙で話しています。「互いに」という言葉が大事です。神の愛は一方的なものです。けれども、私たちが神の愛を受け入れて、この方にひれ伏すことがなければ、神の愛はその人の内にありません。同じように、一方の兄弟が愛を示しても、受け手がその愛を受け入れ、そして自分の神の愛によって愛することをしなければ、神の目的を果たすことはできません。

ですから、神への断食というのは、決して他の人たちとの関係性を無視するものではなく、むしろ積極的な行動や関わりを持つように導くものなのです。ここでは、神殿の再建の工事の間に出来事ですが、ネヘミヤ記には、城壁の再建の工事中に起こった出来事が書いてあります。これは、悲惨なものでした。「5:1-5 ときに、民とその妻たちは、その同胞のユダヤ人たちに対して強い抗議の声をあげた。ある者は、「私たちには息子や娘が大ぜいいる。私たちは、食べて生きるために、穀物を手に入れなければならない。」と言い、またある者は、「このききんに際し、穀物を手に入れるために、私たちの畑も、ぶどう畑も、家も抵当に入れなければならない。」と言った。またある者は言った。「私たちは、王に支払う税金のために、私たちの畑とぶどう畑をかたにして、金を借りなければならなかった。現に、私たちの肉は私たちの兄弟の肉と同じであり、私たちの子どもも彼らの子どもと同じなのだ。それなのに、今、私たちは自分たちの息子や娘を奴隷に売らなければならない。事実、私たちの娘で、もう奴隷にされている者もいる。しかし、私たちの畑もぶどう畑も他人の所有となっているので、私たちにはどうする力もない。」人々がいつの間にか、自分の都合で動き始めました。周囲は、人に貸して、また奴隷にすることとは当たり前の慣わしでした。けれども、それをイスラエルの家の中では決してしてはいけないという戒めを、主は与えておられました。しかし、城壁の再建工事をしている中で、いつの間にか自分たちの利益を求めて、それで苦しみあえぐ人々を造り出してしまったのです。世の中では、自分のために働くことは許されても、神の家では許されないのです。神の家は、神が愛しておられるという原理の中で動いているのですから。

ですから、教会には「互いに」という勧めと命令が数多く出てきます。決して一方方向ではないことが、はっきりと分かります。あまりにもたくさんありますが、ローマ人への手紙だけを取り上げてみましょう。「12:5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」各人がそれぞれ、一つの体の互いに器官だということです。「12:10 兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」互いに愛し合って、互いに尊敬します。「12:16 互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思てはいけません。」互いに一つ心になります、高ぶればそれはできませんから、身分の低い人に順応します。「13:8 だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。」互いに愛し合うことは、借金を返すようなキリスト者の義務なのだということです。「14:13 ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。」裁くことは、互いにやっぺてしまいます。一方の人を過度に批判して、受けた人はそれをやり返して、このような応酬はいけないということです。「15:5 どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようになさいますように。」忍耐と励ましによって、互いに同じ思いを持ちます。「15:7 こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。」互い

に受け入れ合います。一方が受け入れても、他方が拒めば意味がありません。「15:14 私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。」互いに訓戒することが必要です。

4A 心からの奉仕

そして、7章10節で、「互いに心の中で悪をたくらむな。」と主は言われます。そうです、これが真実に語ること、真実に生きることの裏返しの生活です。表向きは何の問題もないように生きているのですが、心の中では、腹の中では違うことを考えているのであれば、おおっぴろげに喧嘩しているのと同じぐらいの悪影響を与えます。主は、7-8章でこのことを強調しておられます、例えば、17節に、「互いに心の中で悪を計るな。偽りの誓いを愛するな。これらはみな、わたしが憎むからだ。」と主は言われました。

パウロが教えました、「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。(ローマ 12:9)」愛の中に、悪を憎んで善に親しむというメリハリがなければ、その愛が偽りになってしまうということです。そして、心の中のことは他の人にもその汚れが広がってしまいます。「ヘブル 12:14-15 すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚れたりすることのないように、」自分の心が主に向いて、平和を求め、聖められていることは、自分自身の霊の平安だけではなく、他の人々にも平安を分かち合うという横の関係もあります。苦みがあれば、それが他の人々を悩ましてしまうこととなります。

このようにして、主は、単に神の家に携わる、その行事をこなすということではない、エルサレムというのは、真実の町であり、その山は聖なる山なのだということを教えています。だからこそ、主がそこにご臨在してくださると言えるでしょう。神の家が建てられる時に、私たちが自分というものが低くなり、小さくなり、キリストが大きくなります。そして、キリストが大きくなれば、自ずと兄弟愛も増し加わります。そしてそこに、主がご臨在されるのです。天にあるシオンが、御霊によってその一部を私たちは味わうことができるのです。「神の国は、飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。(ローマ 14:17)」